

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名： 林 ^{リン} ^{イフシエン} 怡蓓

本論文は、「エスニック・メディア」というメディアの一形態を対象に、それが台湾という地政学的文脈の中で形成された「多重民族・エスニック社会」においてどのような発展を遂げてきたかを把握し、同時に「エスニシティ」と放送制度という二つの概念が出合ったとき、いかなる矛盾と相克が生み出されるかを理論的・実証的に考察した。論文は、三部から構成されており、序章と終章を含め全部で12章からなっている。

第一部では放送制度論、そして「エスニック・メディア」概念の定義について、主にメディア研究の分野での先行研究を検討した上で、台湾社会におけるにおける放送メディアの歴史全般について批判的に考察している。

第二部では、「エスニシティ」と「ナショナリズム」、および「多文化主義」と「公共性」という、本論文の鍵概念について詳細な理論的検討を重ねている。エスニック・メディアは、規範的な視点からいえば、多元的な文化や言語の共生を実現する公共空間を提供することが期待されている。しかしながら、その現実には、仲間内だけの内輪の集まりというイメージがなかなか払拭されず、主流社会やそのほかのエスニック集団との協働関係の構築にも試行錯誤が続く状態にある。また、エスニック・メディアが政府によって打ち出される多文化主義政策を無批判に受け入れ、制度化を進める状況にも注意が必要だとする。そのようなエスニック・メディアが抱える問題や困難の遠因について、第二部では鍵概念の内在的検討を通して探りつつ、第三部の事例につなげている。

第三部では、冒頭の章で台湾を「多重民族・エスニック社会」として位置づけ、その後台湾社会における三つのエスニック・メディアの事例研究が続く。第一の事例は、非合法ラジオ局「宝島客家ラジオ局」について。草の根運動として始まった設立経緯から合法化後の経営と脱政治化までを詳述している。第二の事例は「客家テレビ局」、そして第三の事例は「原住民族テレビ局」である。この後二者局はいずれも政策的な「上からの」思惑によって発足した事例であるが、後年「客家テレビ局」が後に公共放送として制度化への道を行んだのに対して、「原住民族テレビ局」は公共放送への統合を拒否し、異なった道を行んだ。こうした事例をとおしてエスニック・メディアの矛盾相克を示し、最終章において今後のグローバル化、多文化時代の放送制度への展望を述べている。

以上の概要に見られるとおり、筆者は先行研究の詳細な検討と、概念の理論的整理を念頭に重ねた上で、ユニークな三つの事例分析に着手している。そのような手続きを経た上での事例への視線は、決してエスニック・メディアを賞賛するものではない。それは、エスニック・メディアという現象を通して、ナショナリズムとエスニシティ、およびマジョリティとマイノリティが交錯する台湾社会において放送制度が矛盾に陥っていく複雑なプロセスを鮮やかに描き出すものであり、この点がとくに審査員全員から高く評価された。

また、今日まで台湾におけるエスニック・メディアに関する本格的な研究は比較的少ないこと、問題設定に時事性と独創性があること、論文の叙述は正確かつ堅牢であること、そして、個々の図表や資料の引用も緻密かつ的確であることなどによって、論文全体としても質的に高い水準にあるとの評価がなされた。先行研究の検討の部分において、咀嚼に一部甘いところが見られたものの、日本語・中国語・英語で書かれた膨大な量の文献を網羅し、詳細に検討した事実を鑑みれば瑕疵とみなすほどのことではない。審査委員会は、本論文が現代メディア研究及び日本の台湾研究に大きな学問的貢献をする優れた研究業績であるとの見解で一致し、博士（社会情報学）に十分値するものであるとの結論を得た。